

同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(三)―

福田 智子・大久保 孝晃・伍 昆・胡 淑雲

本稿は、同志社大学文化情報学部が所蔵する江戸時代に制作された『百人一首かるた』のうち、歌意絵入りかるた四種について、札の影印を掲載するとともに、翻字と、古注釈を参考した歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。今回は、『百人一首』一二番から一六番までの札を取り上げる。

本稿は、「同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(一)―」(『文化情報学』第十四卷第一号、二〇一八年十一月)、「同―同(二)―」(『同』第十五卷第一号、二〇一九年十月)に引き続き、歌意絵入り『百人一首かるた』四種について、古注釈を参考しながら、歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。今回は、『百人一首』一二番から一六番までの札を取り上げる。

以下、四種のかるたの書誌情報と凡例を簡単に示す。詳細については、『文化情報学』第十四卷第一号を参照されたい。

- (1) かるたA 絵変わり百人一首かるた 資料番号：146700558
 (2) かるたB 歌絵百人一首かるた 資料番号：156700225
 (3) かるたC 絵変わり百人一首かるた 資料番号：166700139
 (4) かるたD 歌絵百人一首かるた 資料番号：176700497

凡例

- 一、冒頭に、『百人一首』の歌番号を示す。
 一、かるた四種の影印を列挙し、その下に翻刻本文を示す。
 一、【字母】では、翻刻の本行本文に即した仮名の字母を示す。漢字や踊り字など、仮名以外の表記には()を付す。
 一、【古注釈】では、歌意絵を考察する際の着眼点ごとに、古注釈の本文を引用する。主として鳥津忠夫氏・上條彰次氏編著『百人一首古注』(和泉書院、一九八二年二月)を参考・引用する。
 一、【考察】では、引用した古注釈に依拠しながら、四種のかるたの図柄を比較検討する。

十二番

[A]



僧正遍昭
あまつ
風
くもの
かよひち
ふきとちよ

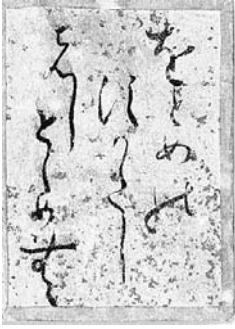


おとめの
すかた
しはし
と、めん

[B]

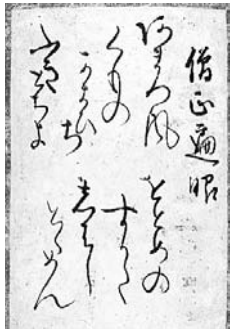


僧正遍昭
あまつかせ
くものかよ
ひちふき
とちよ



をとめの
すかたし
はし
と、めむ

[C]

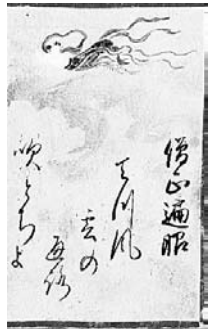


僧正遍昭
あまつ風をとめの
くものすかた
かよひちしはし
ふきとちよと、めん

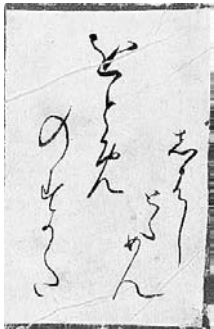


乙女の
すかた
しはし
と、めん

[D]



僧正遍昭
天つ風 雲の
吹とちよ 通路



しはし
と、めん
をとめ
のすかた

【字母】

〔A〕(僧正遍昭)

安末川(風) 久毛乃加与比知 不幾止知与
於止女能春可多 志八之止(、) 女无

〔B〕(僧正遍昭)

安万川可世 久毛能加与比知 不幾東知与
遠止女能須可多 之者之止(、) 女無

〔C〕(僧正遍昭)

阿末川(風) 久毛乃可与比知 不幾止知与
遠止女乃寸可多 志者之止(、) 女无

(乙女) 能春可多 志者之止(、) 女无

〔D〕(僧正遍昭)

(天) 川(風) (雲) 乃(通路) (吹) 止知与
遠止免乃春可多 志者之止(、) 女无

【古注釈】

一、「五節の舞」の起源。

○『経厚抄』

古へ清見原天皇(天武天皇……執筆者注)の御時、天人の下し面影を今の舞姫に寄て云也。かの天皇、吉野の宮にして琴をあそばしけるを感じて、天人下て袖を五度返して舞し也。其時、天皇の御歌に、乙女らがおとめさびすとかり玉をたまだにまきておとめさびすも、とあり。これ五せつの初也。

○『宗祇抄』

五節の事は彼袖ふる山の事より出くれば、(……以下略)。

○『異見』

昔、よし野の宮に天女降りて舞しより、五節の舞姫はじめておこれり、といふふるき説に随ひ、(……以下略)。改観云、五節の起りに二つのよしあり。続日本紀には、天武天皇、礼楽なくしては世は治めがたしとて、此舞を作らせ給ふ、とあり。本朝文粹に出たる三善清行の異見封事には、天武天皇芳野にましましける時、天女天降りて舞けるより、事おこれるよしをかゝる、常の説これに同じといひて、いづれによれりともしるさず。初学に、此続紀の宣命の文を挙て、天女の降りて舞しといふは、浮説なる事を弁したるは中々なり。誰かは続紀をすて、天女の説のみには随ひ侍らん。(……中略……) 事実の来歴はとまれかくまれ、吟詠するにいたりてはその感のよりくるにまかせてさらに虚実の間を扱ふべき物には侍らじ。

○『経厚抄』

五節の舞姫を見てよむと也。(……中略……) 今の歌一首の心一々の舞姫を始としてんと云を、天女に寄て、雲の通路吹とちよと云也。

○『新抄』

そらふく風よ、雲のうちにある道すぢに雲を吹あつめて通はれぬやうにせよ、あの天女どもが舞はてたらば天へかへるであらうが、それをしばしなりともとゞめ置ぞと也。

○『宗祇抄』

五節の事は彼袖ふる山の事より出くれば、只今の舞姫を天乙女によみなせり。

○『色紙和歌』

まひひめをすなはち天女なりとほめて、御せちゑすぎたらばてんへ
あがり給ふべければ、（……以下略）。

○『幽斎抄』

此歌、今の舞姫を昔の天女によみなせり。

○『三奥抄』

今のまひ姫をまことの天女になしてよめり。

○『宇比麻奈備』

歌の意は、（……中略……）天をとめの舞とのみ思ふ也。

○『異見』

昔、よし野の宮に天女降りて舞しより、五節の舞姫はじめておこれり、といふふるき説に随ひ、今を直に天女と見なして、舞はてたる入あやのあかぬ別れを、かくおもしろくよみなせり。

三、五節の舞姫を見た場所

○『師説抄』

此天津風の歌を実義九ぶといふ子細は、天皇舞を名残おしげにおぼしめすを、遍昭御所にあつて、御あひさつの心を読むれば也。君を思ひ奉る所により考べきこと也。

○『龍吟明訣抄』

畢竟貴人達いま一さし所望し給へといふ心なり。

○『宇比麻奈備』

歌の意は、大内は天に比ツふれば、実に此地の事とも覚えすして（……以下略）。

【考察】

『古今和歌集』巻第十七、雑歌上、八七二番に「五節のまひひめを見

てよめる」という詞書で載る歌である。五節の舞の起源については、『経厚抄』『宗祇抄』をはじめとする古注釈に言及がある。『異見』は、『改観抄』にある、天武天皇が作ったとする説（『続日本紀』）、天武天皇が吉野にいた時、天女が天から降りてきて舞ったとする説（『本朝文粹』所収三善清行「異見封事」）の両説を挙げ、「事実の来歴」よりも「虚実の間を扱ふべき物」ではないと指摘する。

「A」「C」「D」のかかるたに描かれる天女は、『経厚抄』『新抄』『宗祇抄』『色紙和歌』『幽斎抄』『三奥抄』『宇比麻奈備』『異見』が指摘するように、五節の舞姫の見立てと考えられる。

「A」は、庭先に立つ僧（作者の遍昭であろう）が振り返り、空の天女を見上げる場面である。その場所がどこであるかは、図柄からは判断としない。一方、『師説抄』『宇比麻奈備』は御所と捉えており、また、『龍吟明訣抄』の「貴人達いま一さし所望し給へ」という解釈も、同様の立場であろう。とくに『師説抄』は、五節の舞を名残惜しそうにしていた天皇の気持ちを思いやった詠と解する。「A」の図柄は、これらの古注釈の言及を反映したものではないと見られる。

次に、天女の姿に着目する。「A」は、右手に蓮のような花を持つ。「C」では、三つの雲のかたまりに囲まれた天女が横笛を吹いている。「D」は、画面上方に、やはり横笛を吹く天女の姿が描かれる。いずれも、空中を舞い、あるいは音楽を奏でて、仏を讃える「飛天」である。五節の舞姫ならば、扇を持っているはずであるが、かるたの図柄は、その見立てである飛天を描く。

同様に、「B」のかかるたも、飛天の姿はないが、図柄の前面には、飛天が奏でる楽器、笙が描かれる。そうすると、画面奥の板状、および半球状のものも、飛天に関連する楽器の類か。

[A]

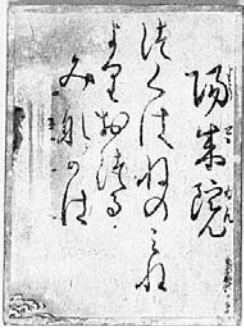


陽成院
つくはねの
みねより
おつる
みなのかは



こひそ
つもり
て
ふちと
なり
ぬる

[B]

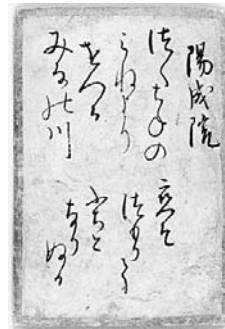


陽成院
つくはねのみね
よりおつる
みなかは



こひそ
つもり
て
ふち
となり

[C]



陽成院
つくはねの
みねより
をつる
みなの川
恋そ
つもり
ふちと
なり
ぬる

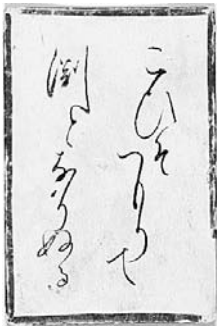


恋そ
つもり
て
測と
なり
ぬる

[D]



川
みな
みねより
筑波根の
陽成院



こひそ
つもり
て
測となりぬる

【字母】

〔A〕(陽成院)

川久八年乃 三祢与利於川留 美奈能可八
己比曾川毛利天 不知止奈利奴留

〔B〕(陽成院)

徒久波祢乃 三祢与里於徒留 美那可波
己比曾川毛里天 布知止那李計留

〔C〕(陽成院)

徒久者年乃 三祢与利遠川留 美奈能(川)
(恋) 曾徒毛利天 布知止奈利奴留
(恋) 曾徒毛利天 (溯) 止奈利奴留

〔D〕(陽成院)

(筑波根) 乃 三年与利(落)留 見那乃(川)
己比曾川毛利天 (溯) 止奈利奴留

【古注釈】

一、「筑波嶺の峯より落つる水無乃川」の流れの解釈。

○『経厚抄』

一滴の漸く積りて、此みなの川の深く成ごとく、(……以下略)。

○『新抄』

つくば山の峯から落る水が、始はわづかなれども、つもりつもりて
みなの川になるごとく、(……以下略)。

○『宗祇抄』

(……前略) 水のかすかなるがつもりて淵となるにたとへいへる也。

○『古注』

つくばねのしげき、此間の露おちつもりて、みなの川といふ大河と
なりてながる、也。

○『天理本問書』

心は、つくばねの峯の岩間のした、り幽に成しが、ふもとに成ては
やがて大なる河となり、淵と成瀬と成り、隙なき事をたとへたり。

○『色紙和歌』

この御歌は、筑波根のみねより出る所はわづかのみなの川なれど
も、末はふちと成たるとく、(……以下略)。

○『師説抄』

(……前略) 筑波の峯より一滴づ、落て水無川と也けるを、(……以
下略)。

○『三奥抄』

万葉歌に、つくばねの岩もどろにおつる水よにもたゆらにわが思は
なくに、これを本歌にあそばせる也。

○『宇比麻奈備』

(……前略) 筑波根の上より落る水のわづかなるが、末はみな川て
ふ深き川となれるが如く(……以下略)。或説に、此峯より真砂の下
を泳(クグ)りて一滴づ、落るなどいふは、万葉にしづくの田井とよ
めるに、他国の濫觴の語など取合せて、強くいひなさんとてするわざ
成べし。

○『異見』

つくば山の高根より、たえだえにした、りおつるみな川の水も、流
れきはまりて末つひに淵となるに、(……以下略)。

【考察】

『後撰和歌集』巻第十一、恋三七七六番に「つりどののみこにつかはしける」という詞書で載る歌である。釣殿のみこ（綏子内親王）に宛てた恋歌であるが、かるたの図柄は、もっぱら筑波嶺の峰（筑波山）と水無乃川（男女川）の情景を描く。

「A」は、山間から滝が流れ落ち、画面左下に水が激しく波立って溜まっている。また、画面右下には牛車描かれ、牛飼いや童と従者が付き従うという構図である。作者の陽成院が牛車に乗り、筑波山のあたりを通りかかったといった情景であろう。「B」も、上句札の左側、上から下に水が流れ落ち、溜まった水が波立っている。いずれも滝のような水の流れが描かれている。

古注釈では、筑波山から落ちる水は、「一滴」（経厚抄）、「わづか」（新抄・色紙和歌・宇比麻奈備）、「水のかすかなる」（宗祇抄）、「露」（古注）、「岩間のした、り幽に成しが」（天理本間書）、「一滴づ、」（師説抄）、「たえだえにした、り」（異見）といったように、当初はわずかな水滴であることを言うことが多い。中でも『宇比麻奈備』は、批判的ではあるが、「此峯より真砂の下を泳りて一滴づ、落る」という「或説」をも挙げる。

「A」「B」の滝の図柄は、これら古注とは一線を画し、むしろ『三奥抄』が指摘する万葉歌「筑波嶺の岩もどろに落つる水よにもたゆらに我が思はなくに」（巻第十四・三四一〇・三三九二）を勘案してのものであろう。

一方、「C」は、下句札の下半分左側に緑色の山があり、その麓に青色で円状に描かれるのは淵であろう。そして画面左下からその淵に続く青色の線は、淵に流れ込む川と見られる。こちらは、結句の「淵（となりける）」を画面の中心に据える。また「D」は、上句札の右側に高い

山を描き、左側の低い山との間を青色の川が曲がって流れており、水の流れには、むしろ緩やかさがある。

十四番

[A]

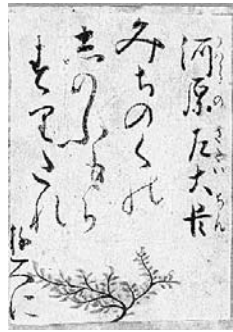


河原左大臣
みちのくの
しのふ
もち
すり
たれゆへに



みたれ
そめ
にし
我
なら
なく
に

[B]

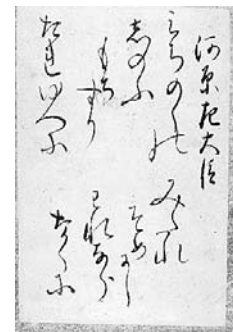


河原左大臣
みちのくの
しのふもち
すりたれ
ゆへに



われなら
みたれに
そめにし
なく

[C]



河原左大臣
みちのくの
しのふ
もち
すり
たれゆへに
みたれ
そめ
にし
われなら
なくに



みたれそめ
にし
我なら
なく
に

[D]



河原左大臣
陸奥の
しのふもち
摺
たれゆへ
に



乱そめにし
われなら
なくに

【字母】

〔A〕(河原左大臣)

美知能久乃 之乃不毛知春利 多禮由下尔
美多連曾免尔之 (我) 奈良奈久耳

〔B〕(河原左大臣)

美知乃久能 志乃不毛知春里 多禮遊下仁
三多禮所女仁之 王禮奈良那久仁

〔C〕(河原左大臣)

三知乃久能 志乃不毛知寸利 太連由下尔
美多禮曾女尔之 王禮奈良奈久尔
美多禮曾女尔之 (我) 奈良奈久尔

〔D〕(河原左大臣)

(陸奥) 乃 志乃不毛知 (摺) 多禮由下尔
(乱) 曾女尔之 王禮奈良那久尔

【古注釈】

一、「陸奥のしのおもぢずり」について。

○『経厚抄』

みちのくの忍の郡より、初摺とて、乱たる紋ある物を奉りし也。

○『三奥抄』

みちのくのしのぶは、郡の名なり。彼さとにむかしすりぎぬを出す
をしのぶずりと云。もぢずりは戻摺モジズリなり。紋をたてよことなくもぢ
りてする故なり。それを恋する心の人をしのぶとて、とかくみだ
る、によせてよめり。(……中略……) 亦むかし信夫のさとに石有、

そのおもてにをのづからの紋有、それにすりけるきぬをしのぶずり
とはいふ、といへる説も侍り。

○『龍吟明訣抄』

龍吟秘抄或抄云、す、きなどをすりたる衣なり。それゆへ乱れとい
ふなりと云々。御説に、さやうの事にあらず。花田アサギに染たる物
なり。うつりやすき心かはしらね共、浅々敷思ひ染たり。段々染々
てこく成といふ心なり。

○『宇比麻奈備』

今の京と成ては板に物のかたちを彫ハキつけ、それに色イロをほどこして絹
布を引かさね、その上を木してすれば、其色そのかたのうつれる
也。(……中略……) こゝのしのお摺もしのお草の形をすりたる物
とはしらるゝ故に、(……以下略)。

○『異見』

或人、信夫郡よりしのお草の摺布を出せる也、といへれど、しから
ず。古今顕注に、陸奥国の信夫郡に、もぢずりとて、髪をみだした
るやうに摺たるを信夫もぢずりといふ、と有を見れば、其陸奥より
出るもの、さらにしのお草のかたに非ず。

○『顕注密勘』

みちのくのしのおもぢずりとは、陸奥国の信夫郡にもぢずりとてか
みをみだしたるやうにすりたるをしのぶもぢ摺と云。

【考察】

『古今和歌集』卷第十四、恋四、七二四番「題しらず」の歌であるが、『伊
勢物語』初段でも人口に膾炙している。

「A」は、屋敷の庭に、烏帽子姿の男性二人が描かれる。左側の男性は作者の河原左大臣（源融）であろう。手に模様のある布を持ち、この屋敷の下仕えと見られるもう一人の男性に見せている。画面の左上に張ってある布にも、融が手にしている布と同じ模様が見える。これらの布の模様は、「しのぶもぢ摺り」を表すものであろう。この場面の場所は、和歌に詠まれていた陸奥であって、融が、手にしている「しのぶもぢ摺り」模様と同じ布を探して、染め物をしていく屋敷を訪ねてきた情景か。また「B」は、一株のシダ科の草が象徴的に描かれている。これは、「しのぶもぢ摺り」の材料として、忍ぶ草を描いたものである。「C」は、薄茶色の生地に、緑色の松の葉状の模様と濃い茶色の広葉の模様がある。これも「しのぶもぢ摺り」の布を描いていると見られる。「D」は、野の風景であろうか。画面左側に五弁の花が一輪と、その右斜め下方にシダ科の忍ぶ草らしい草が描かれる。

「B」「D」には、図柄は異なるけれども、同じくシダ科の草が描かれている。「しのぶもぢ摺り」が、いわゆる忍ぶ草を摺ったものと解釈したことが知られる。『宇比麻奈備』はこの説を支持しているが、その一方で、『異見』は真つ向から否定している。植物で摺ったとする説には、他に「龍吟秘抄或抄云す、きなどをすりたる衣」（龍吟明訣抄）がある。「A」「C」の布の模様は、どのようなものか判然としない。古注釈の中には、「紉摺とて、乱たる紋」（経厚抄）、「戻摺」という「紋をたてよことなくもぢりてする」もの（三奥抄）と説明するものもあり、あるいはこれらを念頭に置いた乱れ模様を描いたものか。なお、『三奥抄』はもうひとつ、表面に紋がある石が信夫の里にあり、これに摺りつけた模様であるという説を紹介している。さらに、「古今頭注に）髪をみだ

[A]

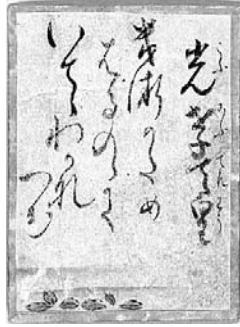


光孝天皇
君かため
はる
の、に
出で
わかな
つむ



わか
ころも
て
ゆきは
ふり
つ、
に

[B]

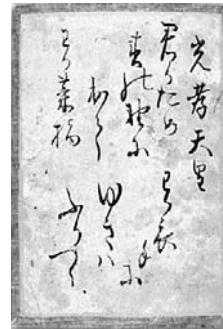


光孝天皇
きみかため
はるの、に
いて、わかな
つむ



わかころ
もてに
ゆき
はふり
つ、

[C]



光孝天皇
君かため
春の野に
出で
わか菜摘
わか衣
手に
ゆきは
ふりつ、

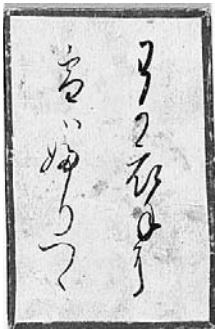


我衣
手に
雪は
ふりつ、

[D]



光孝天皇
君かため
はるの
野に
出で
若菜摘



わか衣手に
雪はふりつ、

【字母】

〔A〕（光孝天皇）

（君）可多女 者留能（、）尔（出）天 和可奈川武
王可己呂毛天尔 由幾八不利川（、）

〔B〕（光孝天皇）

幾微可多女 者留乃（、）尔以天（、） 和可那川武
和可己呂毛天尔 由支波不利川（、）

〔C〕（光孝天皇）

（君）可太女（春）能（野）尔（出）天 王可（菜摘）
王可（衣手）尔 由幾八不利川（、）
（我衣手）尔（雪）八不利徒（、）

〔D〕（光孝天皇）

（君）可堂女 波留乃（野）尔（出）天（若菜摘）
王可（衣手）尔（雪）八婦利川（、）

【古注釈】

一、作者が実際に「若菜を摘む」と解する説。

○『新抄』

そこもとに贈らうとて、春の野辺に若菜をつみに出たれば、我袖に雪が降かゝりて、寒うて難儀にありしと也。

○『三奥抄』

これは、人にわかな給はせんとてみづから野に出て摘せ給ふに、折ふし雪ふりかゝりて御袖も寒けれ共、そのためと思へば寒さもくるしからず、賤しきわざも恥かしからずして摘ためたりと有心也。

二、「若菜を摘む」人は作者ではなく里人の類と解する説。

○『経厚抄』

此歌表は上の御為に若菜を積て奉る里人など也。袖の雪を打はらふといへる苦勞のよし也。裏の心は、臣を指て君とあそばすなり。此若菜をたまふ御志は御衣の袖の雪を打払ひて、摘給へる程の御恵ぞと云心也。

○『米沢抄』

〔同上小書〕君がためとて雪中に若菜つむ、ふびんと也。

三、「若菜を摘む」主体について複数の説に言及。

○『色紙和歌』

このわかなをくださるべきために、春の野の雪を御衣の袖にしのごつませられたりとの心也。又一説、天子の具御にそなへ奉らんとて、しづ山がちのしんくしてわかなをつみぬるをふびんとおほしめし、そのわかなつむ野の雪すなわち御門の御衣のたもとにふりかゝることとく也、（……以下略）。

○『龍吟明訣抄』

或抄云、堯恵云、孝経に天子の章段に帝王みづから漿をとつて民にあたへしとあり。此御歌其心にたがはず仁徳深き御歌なり云々。又云、扱此歌に春の野に出て若菜つむとあればとて、手づからつませ給ふにあらず。たゞ御懇志を仰られむとて也。

○『異見』

君におくらんとてけふしも野にいで、菜つむ袖に、ひらすら雪の降かゝると也。かく今つみ給へるこゝろの御歌なれば、さる野べにて打独ごちてよみたまへるを、そへたまひしと見なすべし。（……中

略……) 門人木下幸文云、ある人の為にとて、親王の御身として雪ふる野べに出て、御手づから摘給ふにはあらず。人に若菜給へる日も雪の降けるによりてかくはよみなし給ふならん、といへるはさる事也。

【考察】

『古今和歌集』巻第一、春上、二一番に「仁和のみかどみこにおましましける時に、人にわかなたまひける御うた」という詞書で載る歌である。

古注釈においては、実際に作者の親王が若菜を摘んだかどうかで説が分かれる。若菜を摘んだのは親王と明示しているのは、『新抄』『三奥抄』である。とくに後者は、「寒さもくるしからず、賤しきわざも恥かしからず」とまで述べている。

一方、若菜を摘むのは親王ではなく、親王は、若菜を摘む人(里人の類)に対して、「御恵」(経厚抄)を与え、また、「ふびん」(米沢抄・同上小書)といった感情を抱いているとする説もある。

なお、「若菜を摘む」主体について複数の説に言及する古注釈には、『色紙和歌』『龍吟明訣抄』『異見』がある。『色紙和歌』は、作者が実際に「若菜を摘む」と解する説の他、「又一説」として、「若菜を摘む」のは「しづ山がち」であるという説を並記する。また、『龍吟明訣抄』『或抄』云々、堯恵云「では、先例を『孝経』に求め、実際に「若菜を摘む」のは作者(帝)という説を挙げる一方、「又云」として、前説を否定している。『異見』も、「若菜を摘む」のは作者とする説を挙げながらも、「門人木下幸文云」としてそれを否定する説を示している。

さて、かるた四種の画像を見てみると、「A」のかるたには、垂纓冠すいゑいかん

を着用した貴族が二人、それぞれ傍らに籠を置き、ひざまづいて若菜を摘んでいるさまが描かれる。左側の顔が見えている人物は、『古今和歌集』の詞書に記されるように、仁和の帝(光孝天皇)の親王時代の姿であろう。また、その右の横顔の人物は、お付きの者と見られるが、仁和帝と同様、垂纓冠を着けていることから、高級貴族であることが察せられる。画面左斜め上から右斜め下への線は、降雪のさまを表すものであろう。また、「B」に描かれる六枚の菜葉も、やはり若菜を表していると考えられる。さらに「C」は、脚付きのまな板の上に、春の七草のひとつ、すずな(蕪かぶ)がふたつ載っている。「D」についても、若菜として菜葉が二株描かれており、その右上に籠がひとつ描かれている。

四種のかかるたには、図柄こそ異なるが、すべてに「若菜」に相当するものが描かれている。当該歌の絵画化にはまず必要な景物であろう。「A」は若菜を摘んでいる場面、「B」は若菜を象徴的に示し、「C」はまさに若菜を料理しようといったところか。「D」は、これから若菜を摘もうという状況が、地に生えている若菜と籠とがともに描かれることにより看取される。

そうすると、古注釈との関連では、とくに「A」の考察が必要になってくる。前述のとおり、若菜を摘むのは作者なのか、それとも里人の類かという点について、両説を並記する古注釈は少なくないが、「A」の図柄は、『新抄』『三奥抄』が明示する前者の説を絵画化したものと見られよう。

十六番

[A]



中納言行平
みねに
おふる
たちわかれ
いなはの山の



まつとし
まつかは
いま
かへり
こん

[B]

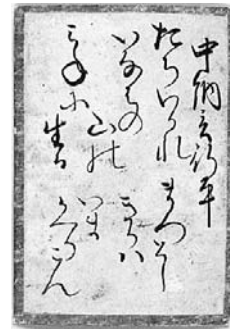


中納言行平
たちわかれ
いなはの山の
みねに生る



かへり
いま
まつかは
まつかは
まつとし

[C]

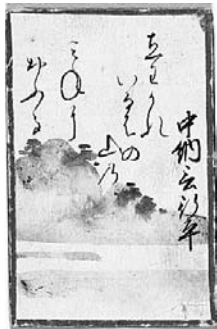


中納言行平
たちわかれ
いなはの
山の
みねに
生る
まつとし
まつかは
いま
かへりこん



松とし
まつかは
いま
かへり
こん

[D]



中納言行平
立わかれ
いなはの
山の
みねに
おふる



まつとし
まつかは
いま
かへり
こん

【字母】

〔A〕(中納言行平)

太知王可禮 以奈者乃(山)能 三年丹於不留
末川止之幾可八 以万可卍利己无

〔B〕(中納言行平)

堂知和可禮 以奈者能(山)乃 三杯尔(生)留
万川止之幾可波 以万可卍利己無

〔C〕(中納言行平)

太知和可禮 以奈者乃(山)能 三年尔(生)留
末川止之幾可八 以末可卍利己无
○(松) 止之幾可八 (今) 可卍利古无

〔D〕(中納言行平)

(立) 王可禮 以奈者乃(山)乃 三年耳於不留
末川止之幾可者 (今) 可衣梨古无

【古注釈】

一、都から下向する時に詠んだ歌という説。

○『新抄』

立わかれて因幡へゆけども都でまつと聞ならば直に帰つて来るであらうと也。

○『米沢抄』

心は、彼国へまかりけるととき母のかたへつかはしける歌也。(……中略……)(同上小書)(……前略) 因幡国へ行トキノ歌也。いなばの山は美濃国ノ名所也。因幡守ニ成テ下ル時ノ歌也。

○『宇比麻奈備』

さて因幡の国の守に任て、思ふ人などにわかれて京をたつ時、(以下略)。

○『異見』

此卿因幡守となられしこと、文徳実録第七に見えたり。此時たれぞのわかれなるべし。

二、任期を終えて上洛する時に詠んだ歌という説。

○『経厚抄』

此歌は、行平卿因幡の国の任の時哉よめりけんと在。任果て上らんとせし時、我このくにをいなばと云秀句なり。下句の心、我を又待人あらば再任もすべしと云心を今かへりこんと云也。

○『色紙和歌』

国の人々まぢぬると聞ば、又この国のしゆごを給ひてかへりこんとの心也。

○『拾穂抄』

師説云、是行平受領にて因幡より上洛の時よめる歌也。(……中略……) 其国の治めよき人は一国の人も国守の帰るをしたふ事也。(……中略……) 今行平も、国民したひてまつとだにあらば満足なるべけれども、さもあるまじきと卑下の心を下に指て此歌を見るべし云々。

○『龍吟明訣抄』

帥殿聞書云、(……中略……) 思ひ出すときかばわざと二度因幡守を願ひ申て下りあはん、去りながら去る者は日々に疎しといへば、日月立たらばわすれやはせん。わすれぬ心とだにきかば又あふ事もこそとの歌なり、との御説なり。

三、一・二の両説並記。

○『雑談』

行平因幡国の受領なりしが、任はて、上洛の時の歌也。（……中略……）又説に、此歌は行平因幡の受領に成て下るとて都にて讀し歌也。さなければ今かへりこむの詞聞えずと云。題しらずとある歌なれば、いかやうにも聞人のこゝろにまかすべし。

○『三奥抄』

これは旅だつ時にのぞみて、相わかる、妻によみて与へける心也。（……中略……）いなばの山は因幡の山なり。みの、国にも稲葉山の山とみるべし。勸物に行平斎衡二年正月因幡守に任ずと見えたり。しかれば彼卿因幡の任はて、後都へ上る時に、かの国に思ふ人有てよみて与へけるうた共いへり。さも有べし。

【考察】

『古今和歌集』巻第七、離別、三六五番に「題しらず」として載る歌である。現代の注釈書では、「因幡の山」を因幡国にある山と見て、行平が因幡守に任ぜられた斉衡二年（八五五）、三十八歳の時の作とする。ところが古注釈は、当該歌が詠まれたのが、「下向する時」か、「上洛する時」かで大きくふたつに分かれる。

都から下向する時に詠んだとする説には、『新抄』『米沢抄』『宇比麻奈備』『異見』があり、『米沢抄』は「母」に、また、『宇比麻奈備』は「思ふ人など」、『異見』は「たれぞのわかれ」に詠んだという。いずれも都にいる人に対する愛惜の情を指摘する。

一方、任期を終えて上洛する時に詠んだとする説には、『経厚抄』『色紙和歌』『拾穂抄』『龍吟明訣抄』がある。『経厚抄』『色紙和歌』『龍吟明訣抄』は、この地の人々が慕い待つならば、という前提で、行平が再任の意思を示したものと解する。また、『拾穂抄』は、国を良く治めた国司は慕われるが、自分はそうではあるまいと、行平が卑下したものと見る。

さらに、これら両説を並記した古注釈には、『雑談』『三奥抄』がある。『雑談』は、当該歌が「題しらず」であるところから、下向時の詠でも上洛時の詠でも、どちらに解してもよく、読む人の心次第であると述べる。また、『三奥抄』は、下向時に「妻」に詠んだという説に言及する一方、「紀氏六帖」（古今和歌六帖）の「国」題に当該歌が配されていることから、「いなばの山」は因幡国にある山と見て、「因幡山」の「松」を当地で詠み、「思ふ人」に与えたという説にも理解を示している。

さて、かるたの絵に共通して描かれるのは「松」である。「A」は、画面中央に松の木が描かれる。その左方に衣冠姿の貴族が馬に乗り、その背後に従者がひとり付いているという構図である。馬上の貴族は作者、行平と見られる。行平も従者も、後ろを振り返っている。また、「B」には、枝が右に左にと伸びる一本の松の木が描かれる。「C」は、まず水辺を描き、画面右下からは一本の松の木が生える。そして「D」には、遠景の山があり、その山頂付近から麓にかけては、緑に彩色されている。松の木を描いていると見られる。山裾にある空間は水辺であろう。

この行平歌の絵画化に際し、やはり「松」は欠かせないであろう。それが「因幡の山の峰に生ふる松」であり、「A」の図柄のように、行平が馬に乗り、松の方を振り返る姿が描かれると、最も単純には、行平が

因幡守の任期を終えて上洛する時の情景として、見る者を印象付けることになったのではなかったか。それは、和歌が、絵画化を通して、解釈そのものにも一定の方向性を与え得るという可能性を示唆しよう。なお、「C」に描かれる水辺の松は、「峰に生ふる松」とは異なるが、因幡国を想定して描いているとすれば、当地の海辺の情景と解することもできようか。「D」の図柄が、山の松を描きながら、手前に水辺を描いているのも、因幡国といえば海辺を連想するという発想が根底にあるのかもしれない。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇一八年度秋学期の授業「日本古典文学情報特論2」において採り上げた内容の一部である。大久保孝晃（一五番）・伍昆（一三・一六番）・胡淑雲（二二・一四番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究第20期研究会第3研究、二〇一九～二〇二二年度）、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一九年度）の一環として、さらに検討を加えた。